

小日向一・二丁目南遺跡見学印象記

榊畑村創造工学研究所

代表 畑村洋太郎

見学日 : 2018年6月9日(土) 10時～11時
 見学場所 : 文京区小日向の旧国家公務員宿舎跡地
 見学催事者 : 東京都埋蔵文化財センター



1. 遺跡の位置

JRの飯田橋駅の北側に「大曲」と「江戸川橋」という場所があるが、江戸川橋から大曲へと流れている神田川の北側に突き出たようになっている「小日向台地」がある。その台地の東の方には「茗荷谷」という谷があり、西の方には「音羽谷」という谷がある。この小日向台地の場所は「日の頭(とう)」とも呼ばれ、たぶん日が射すとか出っ張っているという意味だと思う。小日向台地周辺の地図を図1に示す。

見学の資料に釣り具の重りのようなものが発掘されたことが載っていたので、江戸時代以前は、おそらくこれら谷には東京湾が入り込んでいて、大曲の辺りは湿地か池になっていたのではないと思う。ここまで海または水が来ていて、魚を取っていたのだろう。

江戸川橋という場所があるが、江戸の町が今の東京のような大きくなる以前は、現在の神田川が江戸川と呼ばれていたので、江戸川橋という地名が付いている。江戸川橋の少し西のところで、神田川から取水して、神田の方に上水として流していた。その神田上水が通っていた跡が現在は道になっていて、「巻石通り」と呼ばれている。“巻石”というのは石で囲った暗渠という意味である。

今回見学した遺跡は文京区小日向の旧国家公務員宿舎跡地であるが、遺跡全体の写真を図2

に示す。

以下、発掘されて見つかったことと、それについて自分なりに考えたことを記す。

2. 考えたこと

(1) 竪穴式住居

資料には、今から 7000 年位前、紀元前 5000 年位の縄文時代早期後半にはこの辺りは狩場として利用されていたと考えられると書かれていた。今回の発掘調査では、遺跡からは動物を取るための陥し穴（おとしあな）と炉穴（ろあな）が発見されたようだ。たぶん炉穴は火を使っていたことの証拠だろう。そう多くはないが、縄文式や弥生式の須恵器（すえき）や土師器（はじき）が出てきたということで、実物の展示を見た。

次に、1400 年位前の古墳時代の後期、西暦 6 世紀頃には集落の居住域であったようで、今回の遺跡調査でも竪穴式建物跡が 18 軒確認されたと書かれていた。多くの住居が北側にかまどがある掘っ立ての建物だった由である。

○ 飲み水

私がとても疑問に思ったのは、飲み水をどうしていたのかということである。井戸を掘ったのか？ それとも台地の下まで水を汲みに行ったのか？ 仮に水をイチイチ持ち上げていたのだったら、住居がこんなにたくさん集まるのは無理だったのではないかと。などと疑問に思っていた。遺跡の見学をしたときに撮った写真の中に井戸の跡の写真があった（図 3）。

これについて考えてみると、東京の台地の高さはだいたい海拔 30m ある。なお、ついですが、横浜の辺りは海拔 40m 近くある。たぶん、富士山からの距離で決まっているのではないと思う。海水面のところには不透水層があるとすれば、30m の深さの井戸を掘らなければいけなかったことになる。30m も深く井戸の水を掘るようなそんな穴を掘ることができたのか、というのが疑問に思った。

○ 排泄物

もう一つ不思議に思ったのは排泄物である。人間が生きていれば、水が必要なと同時にトイレが必要になる。また、溜めた汚物を運んで別の場所に移さなければならない。おそらくただ捨てるのではなく、肥料として使っていたに違いない。農業をやるようになったら、人糞を肥料として使っていたに違いないとすれば、ここからの運搬はどうしていたのだろうか？ ま



図2 発掘現場



図3 やはり井戸はあった

た肥料として金銭をやり取りして使う貴重なものとして使っていたのだろうか？

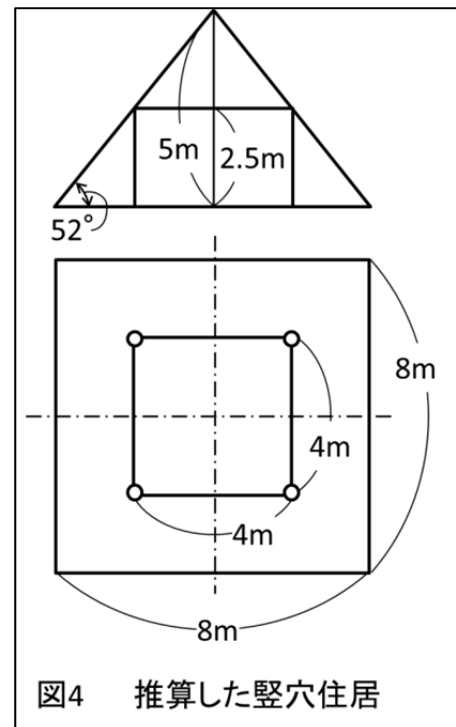
○ 住居の密度

次に竪穴住居の密度について考えてみる。今回の調査面積 700 坪の中に 18 戸も竪穴住居の跡が見つかったという説明があった。国家公務員宿舎が建っていた部分の周辺の空き地の部分を主に調べているので、国家公務員宿舎が建っていた部分まで含めると、平坦な敷地はだいたい 1500 坪位あるのではないかと思う。平坦敷地が 1500 坪とすれば、ここには竪穴住居が 40 戸も建っていたことになる。ずいぶんとたくさん並んでいたものだ。1 戸当たりの平地の面積でみると、約 35 坪ということになる。1 戸当たりの住居が 35 坪は随分広いように思うかもしれないが、住居の周りには道路があっただろうし、住居と道路以外に使われている土地もあっただろうと考えると、ギュウギュウ詰めの団地だったのではないかと思う。

次に竪穴住居の空間体積の計算をしてみる。梁の四隅の寸法がどれも正確に 4m ずつになっていたと書いてあった。そこで、梁の高さが 2.5m、柱と柱の間隔が 4m で、斜面（屋根）が茅で葺かれていたとし、屋根が接地するところの間隔は 8m、頂点の高さは 5m と考える。そこで体積を計算すると、 $8m \times 8m \times \text{高さ } 5m \times 1/3$ で、一軒の家が約 $100m^3$ の空間を使っていたことになる（図 4）。この推算では、屋根の傾斜を 52 度と考えたが、実際は違っているかもしれないので、体積も間違っているかもしれない。

○ 住居の値段

私は経験値として、人間が作る空間は、ものによらず、 $1m^3$ 辺り 5 万円位だと考えている。揚水発電所の空間もそうだし、平均的な都会で今のような値段になる前のマンションの値段など、どれにも共通して $1m^3$ 当り 5 万円だということを見つけて、とても面白いと思った。それを竪穴式住居に当てはめてみると $5 \text{ 万円} \times 100m^3$ となり、今のお金にして 500 万円の値段ということになる。今この辺で売りに出されているマンションの値段を考えると、約 15 坪で 5000 万円位である。一家の主がこれだけの金を集めるのはもの凄く大変だなと思った。昔も今も便利な場所で居心地のいいところを捜そうとするとこれくらい無理をしないといけないというのが現実なのかもしれない。



(2) 龍興寺 (りゅうこうじ)

次に江戸時代の 1654 年から 1908 年に中野区に移転するまで龍興寺という臨済宗の旗本寺があったということが文献や昔の地図などで示されている。この寺は 1721 年に火災に遭ったことが史料に書かれているようだ。小日向にあったお寺が中野区に移転したのにはどんないきさつがあったのか知りたいものだと思う。

明暦の大火は 1657 年のことなのでこの火災は明暦の大火ではないが、明暦の大火後、江戸では、馬喰町、神田、八丁堀などの中心部にあった寺院がおもに浅草方面に移転させられたということである。おそらく巻石通り沿いに連なる寺々も同じ理由で移転してきたのだろう。な

お、江戸城の周りに大きなお寺を配置したが、そのうちの一つが護国寺である。そのような観点から見ると、この龍興寺はそれほど大きなお寺ではなく、中くらい小さい方のお寺だったのではないかと思った。

龍興寺の遺跡には地下室（ちかむろ）があり、収納施設として使用されたと考えられるという記述が資料にあり、実物も見た(図 5,6)。地下室のことは「穴蔵」と言いたくなるが、そう呼んでいたのだろうか？ 「蔵」というのであればものを置いておく所という意味になる。本当の使用目的は何だったのか、何かの冷蔵庫だったのか、食物などの置き場だったのか、火災時に貴重品を置いておく耐火蔵だったのか、それぞれについて考えてみた。

(i) 冷蔵庫として使う

土は保冷材の役割を果たす。これは気温と土の温度の差の顕熱分だけが冷蔵の役割を果たすからである。周囲の温度が高いときには冷気は比重が重いので穴蔵にたまるという性質がある。昔それを計算したことがある。土の水分を含まない土の温度伝導率は 1 日 30cm という計算が出てきた。温度の伝導は 2 乗則に従うので、0.3m を温度が伝わるのに 1 日かかるとすると、距離が 2 倍になれば距離の二乗で 4 日かかることになる。すると、0.6m に 4 日、0.9m に 9 日で、6m に 1 年（400 日と考える）かかるということになる。逆の言い方をすると、この場所は保冷剤として土が使われたという見方で見るとべきだという気がする。経験的にそういうことを見つけて使っていたのではないだろうか。

(ii) 農産物の保冷库として使う

武蔵野台地では、最近までサツマイモなどの芋の貯蔵に地下の穴を使っていたと聞く。芋が凍ってしまうと食べられなくなるため、凍結防止だと聞いたが、それだけではないように思う。“芋をだます”ということを使っているのではないかという気がする。芋はある温度の履歴を経て発芽するので、発芽の時期をコントロールするために冷蔵貯蔵をしているのではないかと思う。冷温貯蔵していた芋をある温度のときに外に出して発芽させる農業技術の一つとしてこういう穴を使っていた可能性がある。穴の二酸化炭素 (CO₂) は普通の空気よりも重いので、底の部分に滞留する。二酸化炭素が発芽を遅らせるとか、無駄なエネルギーを使わないから良いということもあるのかもしれない。一方、人間がそこに入

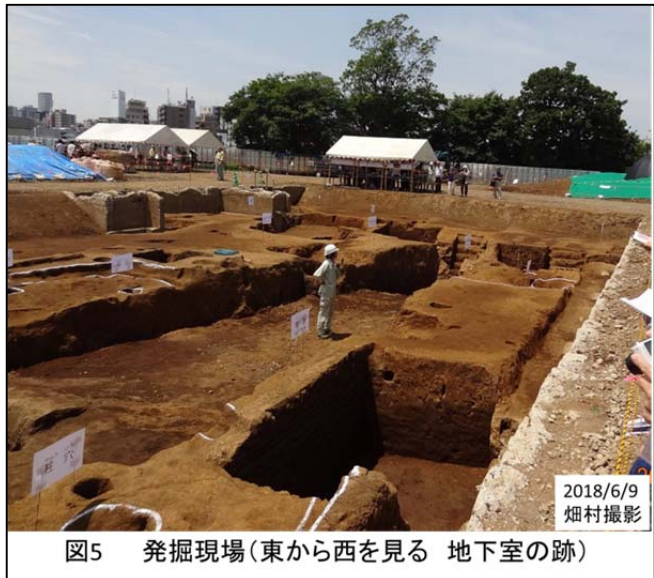


図5 発掘現場(東から西を見る 地下室の跡)



図6 地下室(ちかむろ)

れば窒息死してしまう。この遺跡の穴蔵は深さが2m位だという説明があったが、穴蔵の換気をどうしていたのかというのが気になるところである。

武蔵野台地では、芋を保存するだけでなく、ウドの栽培にも使っていた。武蔵野では今でもウドが栽培されているそう。もう一つ面白いのは、麴を作るのに穴蔵を使っていたことである。神田明神の下の辺りでは、崖地に横穴を掘ってその温度が一定であることを利用して麴を作っているそう。神田明神の入り口のところにある甘酒屋は今でも地下室で麴を作っているというのが売れだそうだから、こういうところに行ってみるのも面白い。

(iii) 耐火蔵

普段から貴重なものを地下の穴蔵に入れておき、火事になったときにはその上に板を敷き、土を被せれば良いだろうと思う。これは落語では、地下の穴蔵ではなくてお蔵の話だが、火事のときに扉を閉め、その目地に味噌を塗り込むというのを聞いたことがある。地下蔵として使うなら、味噌をここに塗り込むというような準備があったのだろうか。

この穴蔵の話を知るとたんにとても懐かしい気がした。それは子供の頃、ラジオの落語を聞きながら父の足もみをしていたことを思い出したからである。父の足もみは大変だったが、落語を聞くのはすごく楽しかった。それで随分たくさん落語を覚えたが、その中の一つにこの火事の際の味噌の塗りこめの話があったような気がする。

以上